

---

# 異世界大掃除?

恋夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界大掃除？

### 【Zコード】

Z7313W

### 【作者名】

恋夢

### 【あらすじ】

シンデレラの世界に飛ばされた私ことソーネは、毎日元気に暮らしています。…いやまあ、シンデレラが豪快とか隊長が不潔とかムノイさんが熱血とか王子様が粘着質とか第一王子がシンデレとかいろいろと不満がないわけじゃないんですけど…うんまあ、楽しいからいいよね。そんな、清潔少女の爽やか（なのが?）異世界とりつぶ物語。第一部突入です、イメージ的には大奥を目指します（無理）。コメディ100%シリアル80%でお送りします。

## 024・呼ばれて飛び出でお掃除し隊！（前書き）

異世界大掃除？を見てからの方が分かりやすいと思います。  
でも一応登場人物紹介！

## 024・呼ばれて飛び出でお掃除し隊！

これは登場人物紹介です

#さわだえい 爽田絵衣【】：掃除大好き十八歳。日本だと女子高校生。将来の夢は掃除婦。極度の綺麗好き。潔癖性とも言つ。顔立ちは可もなく不可もない平凡で地味な印象。綺麗な黒髪で肩までのミディアム。はじめて会う人には大人しい・地味というような印象を与えるが実際はかなりの変人。ゴキブリが大嫌い。異世界では「ソーネ」という愛称で呼ばれている。トリップした最初の頃は隊長の家で住み込み掃除婦をやっていた。一人称は私。

#だーティーアレスト【】：王宮騎士団隊長二十三歳。とんでもない不潔男。でも意外にイケメン（と言つても準イケメンというレベル）。臭い。服がぼろい、デザインが古い、色が汚い、ぶかぶか。将来の夢は特になし。しいて言つならソーネと両思いになりたいとかとか。髪に埃が被つていてよく分からぬが茶髪で長髪。瞳は水色。肌は白いが垢まみれ。どこからどう見ても不潔な人。屋敷は既にゴミの城状態。ソーネからは隊長と呼ばれている。ソーネのことが好き。要するにロリコン大魔神。一人称は私。

#アッジズレイシャンジ【】：上級貴族レイシャンジ家の娘十四歳。幼い頃に母親を亡くし、今は父親と継母、そして姉達と暮らしている。かなり可愛い顔。それなのに、性格は豪快で、「ガハハハハツ」と高らかに笑う。銀の長髪をツインテールにしている。エメラルドグリーンの瞳。これらは全て父譲り。洋服はいつも黒くて古いワンピースに、ほろいエプロンを付けている。将来の夢は竜騎士。ムノイの弟子。自ら掃除をやつたり人助けをしたりする変わり者。愛称はシンデレラ。だが姉や継母とは割と仲がいい。でも、姉たち

がシンデレラにべつたりなのはたまにうざつたい。愛用武器は拳。  
一人称はあたし。

#ムノイ＝ミズレル【】：王宮竜騎士団隊長二十三歳。見た目爽やか中身熱血の面倒くさい奴。やる気のオーラが全身からみなぎっている。顔立ちはそこそこ良い。髪色は明るいオレンジっぽい赤。瞳も髪と同色。体つきは細身で聴診。顔立ちはそこそこ良いのに、熱血過ぎて気持ち悪くなっている。ダーティとは自称親友。ソーネのことが好き…なのかもしれない。シンデレラの師匠。竜騎士なので、一応毎日竜と共に行動している。だが、竜はムノイ以外にはなつかないので、滅多に姿を現さない。愛用武器は竜…？一人称は俺。

#リグト＝ウォールナト【】：ウォールナト王国の第一王子二十歳。軽くて明るく社交的。愛人は何十人、愛を交わした女性は3桁の位までに上がる程。究極の間接無し。王宮に後宮ハaremをつくるのが夢。無駄に美形。鼻筋通った顔に、鋭い瞳。髪は何故かピンク。瞳は紫。性格とのギャップが激しい。自分勝手で阿呆で間抜けな王子様。トラブルを引き寄せる特性を持つ。弱虫で臆病。自分自身で戦うということを知らない。すぐに愛人をつくろうとするのが悪い癖。ソーネを少し恐れている…？一人称は僕。

#リダント＝フルリュウス【】：神様っぽい妖精なんぢやら歳。阿呆阿呆阿呆。これしか言いようがない。姿は人型だが、中身が本当に人なのは不明。一応妖精とか言つている。自分の所有世界をいくつか持つていて、その世界では一応神様という存在になつている。愛称はリップル。ソーネに金の雑巾を渡した。詳しくは「神様に恋愛的休日を。」をどうぞ（笑）一人称はおいら

「これは登場人物紹介です

## 024・呼ばれて飛び出でお掃除し隊！（後書き）

はい、初めまして…？恋夢です。

異世界大掃除第一部突入…とこ「」とで終始「ヤーヤ」している  
恋夢です

いやーこんなのが続いている」と自体おかしいんですけど…  
えつと最初に言つておきますが、更新は毎週金曜日。  
時間帯は決めてません。

諸事情で予告無しに変更になる場合もあります。

あと、中学一年生なので文章も雑、内容は軽い、テスト期間はパ  
ソコンに向かえないという悲劇を背負っています。

受験生に昇進（？）したら更にパソコンに向かえなくなりますが  
…そこは…一ヶ月に一度のペースで頑張りたい…と思つてい  
ます…  
ま、そりこいつ」とで頑張ります…！

## 025・波瀾万丈メイド参上（前書き）

タイトル意味分からぬ。。  
ていうか波瀾万丈つて…一体…。

「それで、貴方がレイ＝サラファさんね」

「違います」

「あら？ そうだったかしら…まあ、いいわ。それで、なに？ メイド志望？」

「違います。掃除婦志望です！」

「なるほど、メイドね。ちょうど良かつたわ、確か、食堂の手伝いが一人辞めちゃって、空きがあつた気がする」

「あの… そうじふ、」

「それで、いつからエリ＝アルファさんは仕事に来られるのかしら…ソーネと呼んでください。今からでも仕事します」

この世界の人に私の名前は通じないらしい。

そんなことを深く実感した、爽田絵衣十八歳さわだえいです。

ふいゝ…。

疲れたよ、ホント。

だって、あの面接の人、私の掃除婦への夢を全然理解してくれないんだもん。

人に自分の夢を馬鹿にされると、凄く嫌だよね、うん。

「ま、でも…」

仕事が決まつてよかつた。

あのときシンデレラのお姉さんに会ってなかつたら、今頃どうなつてしまつたことやう。

路頭に迷つていただうつな、私。

そういうえば、あの面接の人、名前…マリアさんだつけ？  
マリアさんは、メイドの総指揮官だとそうでないとか…。  
というか私は別にメイドになつたかった訳じゃないのに。  
掃除婦になりたかったのに。

それが駄目なら掃除専用メイドになつたのに。

「メイドさん…ついてませ、」

『いらっしゃいませ』主人様とか言つのかな。

嫌だなーそれは。

あ、つていうか、メイド服を着るのか！？  
絶対似合わない…嫌だ……。

こんなことになるなら、メイドじゃなくて聖騎士にでも立候補しておけばよかつた。

…でも聖騎士になつたら隊長と出くわして気まずい思いを味わうことになるしな。

私は一体どうすればいいんだろ？

悶々と私が考えていると、後ろから声がかかつた。

「ちょっと、ソーネさん…」

「え…？あ、なんだー、マリアさんじやないですかーー…」

わつわつとばかりのマリアさんの『』登場である。

おやまあ、『』丁寧に走つてきてくれたようだ。

悪いなーなんて重いながらにんまりと微笑むと、マリアさんの顔がサッと青ざめた。

……しつつついれいな！！

「貴方ねえ…！一応、試験があるから着いてきなさいって言つたじやありませんか！なのにどうして、どうしていきなり私の逆方向へと歩き出すの！？ねえつソーネさんは私のことが嫌いなの…？」

ただ貴方の話を聞いてなかつただけです！

ある意味怖いです！

何かトラウマでもあるのかこの人。

「…もういいわ。いいから、ちやんと着こなせ。」  
「はい。」

マリアさんが、くるつと踵を返して歩き出す。

『背中で語る女、マリア』みたいな！？

「ソーネさんつ着いておいたのー?」「ーますー少しお前にシーバー

目の前で呆然としているマリアさん。  
目の前のピカピカになつた清潔な倉庫。  
そして、ふんぞり返つてゐるこの私。

…えつへん。

マリアさんに、試験の科目は自分で決めていいと言われたので、迷わず掃除を選んだ大人げないソーネです。

おかげで、つい三十分前までは小汚かつた倉庫が、今じゃぴっかぴかのきつらきら！

これにはさすがのマリアさんも驚いたようだ。

「そ、…そーね、さん……」

「はい！ 合格ですか？ 合格ですか？」

「…貴方、何者……？」

え！？

…人間、だよね。

いや、この世界だと私は「異世界人」…？

…それ以前に宇宙人ですと名乗った方がいいのか…？

「…私は、…しがない掃除婦を目指すちよつと綺麗好きな女の子です」

「…合格よ！…もー、勝手に元気でも掃除しちゃって…！」

「あざーっす！！！」

「え？ アジャーシュ？ 何なのその言葉」

そうか、あざーすは日本でしか通じないのか。

さすが異世界。

今更ながらに、ここは異世界なんだなあと感動した私でありました。

隊長へ。

はいはー（もじをかくのせぜじめひなので、またなべてすこません）

おげんせでしゅか、隊長。

わたしがんせです。

おしるのめごとのしけんじげいかくしますた。

こんじゅうは隊長のこゑにこなむがつなのでがみをおくつました。

した。

いのせかこのもじはめんびへれこどすね。

まだじょりゅにかけません。

まりあれそにとづくん？をじてもりひしてこます。

「あーです。

あ、まつあれそにこゑのせ、ぬこびやくのますです。

ねこてす。

きよひをだし。

せなかでかたるおんなです。

そういうわけでそーねはきよひもがんせです。

隊長、じつてこますか。

めいぢのじょくじはこちにかになんぢすひ。

しんじゅこううなので、ばかおーじのといひにこつてしょくつよ  
うをうぱりります。

じほんじんせこわにかしゅくたべなきやだめ、せつたい！

わうこうわけでそーねはきよひもがんせです。

らこしうはたいてちゅうのこゑにいけるとおもひので。

すこしほかんにいひなせこかつをじつてくだせこね。

やーねよ。

ついで。

わたしあこよひのふらこぱぬを隊長のやしきからおしきにまつて  
あぐわるとうれしこです。



## 025・波瀾万丈メイド参上（後書き）

どうしても今日中に投稿したかつたんです…初投稿が登場人物紹介だけなんて虚しすぎるじゃありやあせんか…！

：あ、隊長への手紙、読みにくくてすいません。

読まなくていいです（え。

あと文章が所々おかしいのは作者のせいではなくソーネちゃんのせいですから！

ソーネちゃんのせいですから！（大事なことなので一回書く）

あ、でも誤字脱字ありましたら言つてください

## 026・カルシウム不足の先輩（前書き）

皆様、台風は大丈夫ですか？  
私は無事です。

その日の学校はお休みになりましたけど。

## 026・カルシウム不足の先輩

「ソーネつ、ソーネつ……さつ もと起きなつ、朝よー。」

メイドの朝は早い。

目を二三すりながら飛び起きた私に、いきなり罵声が降ってきます。

「全く、これだから新入りは困る。ソーネ、アンタすつ『ぐく遅刻』

凄く遅刻つて、なんか変な日本語…じゃなくて、異世界語。  
私は、ルームメイトのなんぢやらリーノさんに起こして貰つてい  
るらしい。

住み込みのメイドとは言えども、一人一部屋貰える訳じやない。  
四人一部屋という制度らしいが、私が入れてもらつている部屋は、  
私を入れて三人である。

一人はメイドのボスのマリアさん。  
で、もう一人はメイドの次期ボスと噂されてるらしい、なんち  
やらリーノさん。

この人は早口なので、名前を聞き取れなかつたのだ。

「そうなんですか……」

「そうだつてばーさつさと着替えて、迷惑！」

「はい…。えつと、何に着替えましょつか…？」

「はあ！？ちょっと、アンタつて信じらんなーい！メイド服を着る  
に決まつてんでしょ、早くこれ着てよね！」

なるほど…。

やはりメイド服を着るのか。

出来ればフリフリ、らびゅりーなものは避けたいな。

なんちやらリーノさんが私に突き出したのは、至ってシンプルな  
紺色のメイド服。

何となくガツツポーズの私。

ただ、メイド服に添えられてあるHプロンに…少しだけフリルが  
ついているのが少し気になる。

いや、ほんのちょこっとだけね、でも気になるよね！？  
裾のところにちょっと着いてるだけでも邪魔だし？

…切ってしまおつか。

「ソーネ！聞いてる！？」

「聞いてません！」

「はー？」

しまった、つい条件反射で…。

慌てて口をつぐんだけれど、時既に遅し。

なんちやらリーノさんの後ろに、怒りの炎が見える…。

「そおおおおおねええ！アンタ、新人のくせに…ひ、  
「じ、じ、じ、じめんなさいすいませんでしたリーノさん…」

なんちやらリーノさんの口がぽかんと開く。

…更にしまったあああ！

もしかしてリーノって名前じゃない？

嘘だろおおお…。

「……ちょっと、あり得ないーーーあたしの名前覚えてないのーー? ダディよ、だ・で・いーど」がリーノよー?」

だ、だだだ、だでい…。

頭の中で何度も繰り返す。

でも、その名前はしつくり来なかつた。

…いきなりダディって言われてもなー…。

「これなりじやないわよー昨日ちゃんと血口紹介したわー!」

およ!?

何故私の声が聞こえている!?

「駄々漏れよーー心の声つて血口へべらこなー、むせんと聞こえないよつこ咳きなーーーー!」

いやいやむせんと心の中で咳いてますつてー

私は何も悪くない!

そう思つて胸を張ると、ダディむせんが一つため息をついた。

「ため息一つつき幸せ三ついただきまーす」

「あー?何言つてんのよソーネー!意味わかんない[冗談はやめて、むせんと着替えなさいー!]

意味わかんないだなんて酷い。

この言葉は日本では当たり前だの一文字なのー

…つて私何を言つているんだろつか。

とりあえず落ち着いて、そつじょぶ。

「じゃあ、私着替えるので……」

「わざわざそろそろしてさよーだいーー」さつま迷惑してんのよー。

他人の迷惑顧みずつてやつですね。

「了解です、ダテイさん」

「やつとあたしの宿前覚えたのね……」

「イエス・サーー！」

「は…？」

あ、何でもないです。

お氣になさりがす。

… わてど。

今日からメイドー

頑張りますか。

「ソーネさん、それからダテイ。遅刻ですわ。何をしていたのかしら？」

「ちよつ、マリアーあたしはただ、ソーネを起こして行つていただきよー」

「「みんなでマコアさん、遅れちゃいました

怒り出すダテイさんと、素直に謝る私。

マコアさんは、私とダテイさんを見比べて、ため息をついた。

…また一つ幸せが逃げましたよー。

「…ソーネさん。貴方は新入りなんだから、遅刻は厳禁のはずよ。

そしてダーティ。貴方、ソーネさんを起<sup>さ</sup>すのだけの時間しかけているのですか！」

マリアさんが静かに怒り、ダーティさんがふーっと頬を膨らませた。  
「子供だな。

内心ダーティさんをあげ笑つていると、ダーティさんはかくと頭を叩かれた。

「いつ……たー……」

「だあれが子供だつてえ、ソーネ」

「だ、ダーティさん……ビリして私の心の声が聞こえていんんですか…！」

「だーから駄々漏れなのよアンタはー。」

私とダーティさんがざわざわ騒いでいると、マコトさんがまた一つため息をついた。

「…幸せが…また一つ、消えていく…。

「…もういいわ。一人とも持ち場に行きなさい。ソーネは、私が案内しますわ」

「はーい」

「ちゅうとマリアーあたしは悪くないんだからねー? 分かってるのつ?」

「ええ…分かっていますわ、もうひるさん

マリアさんが憂鬱なしぐれ言つて、ダーティさんはまたむきーつと怒つて…。

隊長。

私、どうやらホームシックはからずには済みそうですが。

「ソーネさん、着いていらっしゃい」

「はーい！」

「ソーネ、アンタしつかり仕事しなさいよー。」

「分かつてますよーだ」

あつかんべー、ヒダリさんに向かつて舌を出す。  
すると、ダディさんは真つ赤になつて怒つた。  
カルシウム不足ですよ、ダディさん。

## 026・カルシウム不足の先輩（後書き）

マリアとダーティはサブキャラです。  
名前は…覚えても覚えなくてもいいと思いますけど…  
主要キャラが全然出てこないのは何故だ―――！

正直、私は、この仕事に就いたことを後悔し始めてくる。

「エリが、ソーネさんの持す場ですわ。お仕事に精を出してくださいね」

もう言つて、マニアさんは去つていく。

……べ。

こんな場所に、私を置いていくつもつですか。  
ちょっと待つてよ。

ねえ、エリ、厨房じゃないの？

「うこーす」

「昼食三百人分の注文来ましたーあー」

「ああ!? んだとお?」

「三百人なんて出来る訳ねーだろーがー断れ、断れ!」

「で、ですが、この注文は、聖騎士団からの注文なので…断つにく  
いです」

「なにい? セイキシダン? ああ、あのむそつくるしい連中な。あい  
つらなが、適当につくつたもん食べさせときやいいだりーよ。その  
辺の「マジック」を集めてスープでも作れ!」

「うこーす」

……………

狭い厨房に、大男達が何十人も集まつて、わいわいがやがやと大鍋を囲んでいる。

しかも、物騒な会話がそこらじゅうを飛び交つているのだ。

「あつれー、おかしいな…私、メイドの仕事をするんじゃなかつたっけ…？」

それが何で、厨房で大男達に囲まれて仕事をしなければならないのだ。

私が呆然と突つ立つていると、大男の一人と目があつた。

「あれ？…、おめえ、新入りか？」  
「はつはい！エイ＝サワダです、ソーネと呼んでください！」  
「ふーん…。じゃ、早速だけど、その辺の『ゴミ』集めてこの鍋に入れてくれる」

……ごめんなさいマリアさん。

私、お仕事初日で追い出されそうです。

「…………んな…、」  
「ん？どーかしたのか、新入り」  
「…つざつけんな！…！」

その場の空気が一気に固まり、厨房のむせ苦しさが若干消えた。

叫んでから後悔する。

でも、もう止められなかつた。

「何で騎士団の人達に『ゴミ』を食べさせようとするの…？騎士団の人なら何食べてもいいってどーゆーこと…？あのね、あんた達みたいに適当に生きてる人と違つて、騎士団の人達は、毎日一生懸命訓練して、働いて、汗水垂らして生きてんのよ！その人達に食べさせる

ものが「ミー・？信じられない！」

そこで一息ついて、私は厨房を見渡した。  
みんなが唖然として私を見ている。

「あんた達みたいな奴ら、職人として失格よ！もちろんシェフとしても駄目！シェフなら、手加減なしに本気で料理をつくりなさい！」

掃除婦とシェフ、多少違いはあるものの、心意気は一緒のはず。  
お客様を喜ばせたい。

部屋を綺麗にして、住人の笑顔を見たい。  
美味しい料理をつくって、お客様の笑顔を見たい。

それなのに、この厨房の奴らは……、ツ！

「お、おい新入り、てめ、口答えしていいと思つてんのか！？」  
「ええ、いいんぢやないですか！？あんた達くらいになら、いつく  
らでも口答えしちゃいますよーつだ。だつて絶対私の方が、精一杯  
生きてますもん！あんた達に指図して生きるくらいなら、職なしで  
フラフラしてる方がまだマシだわ！」

大男の顔が羞恥で赤く染まる。

おうおうおう、今更自分の行いを恥じたつて遅いのよばーか！

心の中であつかんべーをして、私はフンッとせせら笑つた。

その笑いに反応してか、大男のこめかみがぴくりと動く。

……あ…なんか、ヤバあい雰囲氣…。

じり、と私が一步後ずさる。

それを見た大男が大股で一步私に近づいた。

「てめえ……っ、許せねえ！」

「つちよ……！レディに手え出すとか、サイテー！」

「知るか、てめえみてーな女はレディじやねー！」

大男が、太い腕を振り上げ、ごつつい拳を私に向かつて振り下ろした。

私は瞳をつぶり、衝撃に備える。

がつんつと鈍い音がして、一瞬、目の前が真っ白になった。

…少女漫画だと、この辺でかつこいい王子様が登場しているはずなのに。

現実は……というか、異世界ではそう上手くはいかない。私は無様に殴られて、ものすごい勢いで空中を飛んだ。

「つ……こつたー……」

「もう二三発殴らせう」

「さ、さいて、え、！」

キッと大男を睨むも、まるで効果なし。

大男が、またも腕を振り上げた。

次の衝撃に備えて、私は堅く拳を握りしめる。

そのとき、私は暖かい何かに包まれた。

「…私のソーネに、何をしている」

聞き覚えのある声にはつとなり、私が、暖かい何かを見つめる。そこには、恐ろしい顔をした隊長が居た。

……誰がいつぞいでアンタのものになつたと言つんだ。

「隊長、いつの間に、」

「……遅くなつてしまなかつたな。会話はほとんど聞いていたのだが……入り口のところで、あいつらに押せられていた」「

くいつと顎で、入り口付近に突つ立つてゐる大男達を指す隊長。  
…何やってんだ、あの大男達。

「……で、お前達は、我が騎士団の昼食に“ゴミ”を出やつとしたあげくに、ソーネにまで危害を加えた。…これを放つておく訳がないよなあ」

隊長が私をぎゅっと強く抱く。

苦しいです。

大事なことなので一回言いました。  
苦しいです。

「お、おれらは別に…危害を加えようとした訳じゃ…な、なあ、みんな?」

「……くわえただろうつが」

私を殴つた大男の言葉に、隊長が反応して、周りの温度が氷点下まで下がつた。

…怒らせちゃつたよ。

馬鹿だな、この男達。

「……ソーネ、」

「はい」

「……つぶしていいか」

大男達より若干小柄な隊長が、つぶすと言つのはどうつかど。隊長がつぶすと言つたら本氣でつぶすのだろうけど。

「マリアさんに」「承を得ないといけませんね」

「まりあ……。……ああ、侍女長か」

……じじょ……、ああ、メイドか。

「わうにわ」とです

「……それなら問題はない。……なあ、侍女長」

……え?

「ええ、問題はありませんわ。“ぶつぶつぶして”くださって結構です」

私の視線のその先に、何故かマリアさんが笑顔で立っていた。



数秒間時間が固まつたような気がしたのは私だけだらうか。

「ま、マリア…お前、何故ここに」

「ソーネさんの様子を見に行きたいと申された聖騎士団隊長殿を案内しに来たのです。そして来てみたらこの有様」

ひつ、と大男が喉をならした。

「さて。貴方達にはどのような処罰を受けて貰いましょうか。え？  
何でもどんとこい？あら、それなら隊長殿にお任せしようかしら」

「……斬る」

なんて物騒な！

騎士団さんの隊長といふことは、隊長も結構強いのだらうし。  
斬るのは痛そう、だしさ。

「隊長、それにマリアさん。この大男達の処分は、厨房から追い出すことだけでいいんじゃないでしょうか…？」

一人の機嫌を伺いながらそう訪ねると、二人がそろつて嫌そうな顔をした。

何でこんなにも息ぴつたりなんだこの人達…。

「何故ですか、ソーネさん」

「……何故だ、ソーネ」

「え……と……その、あの……私もまだ一発しか殴られていませんし？」

「一発“も”ですか、ソーネさん」

「……アイツやつぱり許さん。ソーネの体に傷を付けていいのは私だけだというのに」

待つて、隊長、それおかしいから。

怖いから。

私の体は私のものだから！

「あら隊長殿。ソーネさんのこと好きでいらっしゃるのね？」

「……まあな」

はい待つて！

何言つてんの隊長！？

認めちや駄目、駄目！

私が恥ずかしいから、止まつてくださいませー！

「まあ、素敵だわあ

「……」

ちょ、隊長得意げに鼻をのばすな。

もういつそマリアさんと隊長がくつこけやえぱいいのー。

「それはお断りしますわ

「……それは断る」

何で私の心の声が聞こえてるんだろうこの人達。

もう泣きたいよソーネは。

結局、大男達は仕事を辞めさせられるといつ処分になった。  
隊長はしきりに私の殴られた方の頬を気にしていて、マリアさん  
までもが、「お仕事休んだ方がいいんじゃないかしら」などと言つ  
てくれた。

いや、別にそこまでしなくてもいいですから。

そんなこんなで大げさすぎる処置を受けた私である。  
少し腫れてしまつた頬には、どでかいしつぶが貼られた。  
目立ちすぎだと思う。

「ソーネ、本当に大丈夫か？」

「大丈夫ですって」

「ソーネさん…、ごめんなさいね」

「いえいえ、責任は私にもちょこ一つとありますし、ね？」

そして、私に降りかかってきた大きな任務。

それは、聖騎士団さん達のお昼ご飯をつくること、だ。

大男達が居なくなつた今、あのむさ苦しい厨房はどうやら…。  
目の前にあるのはただただだつ広いだけの厨房。

…さて。

今から、何をつくらうか。

手伝ってくれるのは隊長とマリアさん。  
と言つても隊長は全くアテにならない。  
希望はマリアさんだけだな。

…うーん… 今日の献立は…。

「…よし、決めた」

「ソーネさん、何をつくりましょーか」

「今からパンを焼いたりするのは無理そうだし、パスタも面倒くさい。スープ系でもいいけど、それだけじゃ訓練に訓練を重ねてきた男達の腹には足らない。となれば、」

「となれば…？」

「肉、肉、肉。お肉ですよマリアちゃん…」

きょとんとした顔のマリアさん。

ふふふ。

「この技は地球では、大家族でよく使われるのだけれど… こっちの世界ではあまり使われないのかな。

「その時はBBQ。バーベキューとも言います。さあ、お肉と野菜をたんまりと用意してくださいー！」

それから、私とマリアさんは大いに働いた。

隊長は、私達が慌ただしく動く様子を見ていただけだけど

「マリアちゃんつ、綱つてありますかー！」

「あみゅ？ 何なのかしらそれは」

「え…ないの！？えっと、じゃあ、大きなフライパン…とか、鉄板とか、」

「そりいえば、厨房のどこかにフライパンを平たくのばしたようなものがあつたとか…なんとか…言つていたような気がしますわ」

「それです！」

肉はある。

そしてここには、調味料もある。

野菜もある。

ただ、網がないのだ、この世界には。

畜生、せめてここが大昔の日本だつたらなー。

江戸時代くらいなら網あるんじゃないの！？

なんで聖ヨーロッパ風の異世界に来ちゃつたんだ私。

「これかしら、ソーネさん！」

「違いますつー、それはボールですつー」

「あら…違つのね、残念ですわ」

マリアさん、意外と家事出来ませんね。  
つていうか料理したことないでしょつ。

「じゃあ、どれでしうね…。厨房が広すぎて分かりませんわ」

「あの大男達なら、全ての器具の場所を把握しているのでしょうか  
…私やマリアさんが探すのは無理がありますよね…」

どうしよう。

騎士団の男共の腹を満腹にさせるには、これしか方法がないのに。  
肉や野菜を焼く以外は全てセルフサービスだし、焼くだけなら簡単だ。

要は材料を用意しておけばいいだけなのだから。  
でも、肝心の鉄板がないと…。

「…おいソーネ」

「何ですか隊長、今忙しいので黙つていてください」

「……聞け。というか見ろ」

「だから、忙しつって言つてるじゃないですか！」

私がぱっと振り向くと、田の前に黒い何かが。

「あ……れ、このきらきらとした黒光り……どこかで……どこかで見  
たことがあるような……？」

「て、鉄板！！」

「……だから、見ろと言つただろうが」

「あら、これですの、ソーネさんが探していたものは」

「これです、マリアさん、隊長！！ありがとうございます隊長！」

「別に。私達のために頑張つているソーネを放つてはおけな

「よっしゃああこれでBBOが出来るうつーー！」

「……人の話を聞け」

## 028・BBOそれは大家族の一般行事（後書き）

うふ。  
うひゅ。

何でこんなことになつたんだろう。

設定と全然違つよ！？

設定ではここいらで新キャラが…登場してゐ…はず、なの、にい。

さて、重大発表。

というかおなじみの…、テストです（涙涙涙；　；涙涙涙）

そういうわけで次の更新は恐らく不可能です！

ごめんなさい…！

テスト勉強に集中できるかどうかは分かりませんが出来るだけ頑張ります。

029・フラグがこいつまん（前編）

フラグをね。  
ほきつとね。  
折っちゃうのね？

## 029・フラグがいっぽん

「はい！それではっ、びーびーきゅー大会を始めたいと思ひます！」

「おおおお、という声が城の中庭に木靈した。

す、凄い熱氣…つ。

というか汗くさい。

稽古から終わってすぐに来たんだろうな、この人達は。

「では、一列に並んでくださいー！」

ちなみに、指揮をしているのはダディさんである。

マリアさんはその隣で微笑んでいる。

騎士団の男共……じゃなかつた、方々は、マリアさんに見惚れ、  
ダディさんを恐れているようだ。

さすがダディさん、笑う子も涙の恐ろしい声。

「ソーネ、あんたなんか言つた？」

「いーえ、別に何でもございませぬ！」

ダディさん怖い。

恐ろしいよ本当。

人の心まで読むなんて……超人ですか。

「ソーネ、あたしに何か隠し事してない？」

「えー……つとおお……、あ、はい、ダーティさん、皆さんがお肉を待っていますよ。」

適当に話をそらして、レモンと逃げる私。

さてと、私は肉焼き係の方の様子を見に行くか。  
肉焼き係こと隊長は、汗をだらだら垂らしながら鉄板の前で仁王立ちをしていた。

……阿呆か。

「たいちょー、何やつてるんですかー」

「…肉が焼けるのを待つてい」

「肉といこのはひつくり返さなきゃこびますー」

とことん家事について知らない人だな。

せめて肉の焼き方くらい覚えようよ。

つていうか何も、仁王立ちしなくても良かったのに…ねえ？

「隊長、とりあえず肉焼き係の座を私に譲つてくださいー。」

「…」

「あーーー、上げてるー肉がーーってゆーか野菜はーーあ、焼き肉のたれがない！」

どたばたと大騒ぎする私を尻目に、隊長が肉待ちの最後尾に並んだ。

…さてと。

それじゃ、戦いに移るとしますか。

「ソーネちゃんつ俺に肉十枚！」

「野菜野菜野菜肉肉肉肉肉肉の組み合わせでお願いします」

「おいら俺の肉返せよてめえ！」

「先輩に譲れよ、いいだろ、なあ？」

「肉肉肉うううーつ」

もまれている。

今の状況を言葉で表すならずぱりそれだ。  
もまれている。

むち苦しく汗くさい男共に、私は、もまれている。

さあんざんに押しつぶされて、臭いと熱気に負けそうだ。  
…畜生、ここで負ける訳にはいかないのに。

奴らは、肉を欲してここにやってくるのだ。  
それなのに肉を貰える役目を授かつた人間が、こんなところへ  
たばつてどうする？

「つづ並べつて言つてるやしそうが皆さん！一列です一列！今列か  
らはみ出てる奴はさつさと一番後ろに並び直せ！さもなきや肉は一  
枚も渡しませんよー？」

精一杯の勇氣とめいっぺいの本音を詰め込む。

その場の空気が固まり、列からはみ出ていた男達が、素直に列に  
並び直した。

…これでいい。

私は、一人につき十枚ずつのペースで肉を焼く。

男達はがつがつと、もぎゅもぎゅと、豪快に肉を食べていぐ。  
そしてまた並び直すのだ。

…どんだけ食う気だこいつら。

「」のままだと今まで食いつぶされてしまいそうだな、うん。  
そんなことを考えながら、ただひたすらに肉を焼く私。

「…肉、くれ」

「言われなくともあげますよ……って、なんだ、たいちょー」

「……無理、するなよ」

「してませんよ。人ノ役ニ立テレバ私ハソレテ良イノデス」

「…棒読みだぞ」

苦笑しながら隊長が私をからかう。

隊長と喋りながらも、私は肉を焼き続けた。

だつてこのままだと、男達が食べるスピードに追いつかないし。  
汗が滴り落ちるのも気にせず、とにかく肉を焼くのだ。  
それしか私に出来ることはない。

「はい、ビーぞ隊長」

「……ん。…ほれ」

え？

隊長が、私から受け取った肉を箸でつまみ、私に差し出している。

「…」これは、食べろということか？

毒味？

「別に毒なんか入れてないんですけど、」

「…ひねくれてないで、さつさと食え」

はーい。

とりあえず素直になつてみよつかな。

隊長が差し出している肉をぱくりと食べる。

……うん、毒は入ってない。

それに、味もなかなかじやないか？

「んーまーーー」

「……きちんと食べてから話せ。……じゃあ、私は行く  
「ほーいー！」

さて。

今のはフラグに入らない、よね。

……くそーっ、意識しているのは私だけなのだろうか。

「……ジ、」

隊長は、ソーネが見えなこと「いままで来て、はあとため息をついた。

……心臓がばくばく鳴っている…。

「……可愛すきだら、ソーネ」

……意識しているのは私だけなのだろうか。



## 029・フラグがいつまん（後書き）

ただいま帰りました、恋夢です！  
うーんと、リハビリ中なので、いまいち筆の感覚が鈍りますが…。  
なんとか頑張りましたよえっへん！

## 〇三〇・シノトスの恋（前書き）

今回が僕にとって二回目。

誰かが、私を呼んでいる。

誰……誰……？

隊長かな、マリアさんかな、それとも……、

「ソーネ！ アンタ、何居眠りしてんのよー！」

「…つうわー…嫌な目覚めー。…ダテイさん？」

「何よ、嫌な目覚めつて。好きで起こした訳じやないっての。ほら、れつわと仕事やつな」

なんと。

厨房の監視役に、ダテイさんが推薦されてしまつたりしこのだ。

そのおかげで、私は毎日しき使われている。

居眠りもできやしない。

だいたい、ダテイさんは人使いが荒いのだ。

「今日は私、何すればいいんですか」

「これ買つてきて。食材。夕食の」

「ほーい」

「返事は“はい”！」

「はーい」

夕食の食材なら、今から買い物に行って、歩いて行くとしたが、時間は自由時間がある。

…よし、シンリケのリードのところ遊びに行こうと。

「ソーネ」

「はー！」

「寄り道するんじゃないわよー！」

「…隣町までひとつ走りで行つてきます

セーーと。

シンデレラの家までひとつ走り行くか。

「いってきまーす！」

「せーと帰つて来なさいよー！」

了解です、四時間後には帰つてきます。

懐かしい街並みが、私を通り過ぎていく。

最初にシンデレラの家にむかつて、それから三時間ぐらゐ遊んで、  
市場に寄つて帰ればいいよね。

我ながら冴えてる！

そんなことを考えながら全力疾走していると、私の田ん、シンデ  
レラの姿が飛び込んできた。

「シンデレラっ、久しぶりー！」

「ん？…おお、ソーネじゃないかつ！ガハハハッ、元氣そうだな！」

麗しい姿からは想像もつかない口調で、シンデレラが豪快に言葉  
を返してくれる。

うー、このやつとり、久しぶりだな。

「元気元気、超元気！」

「チヨーゲンキ？まあ、楽しそうで何よりだー」

「そつちは、何か変わったことある？」

シンデレラに癒されるつていつのも何だけど、最近忙しかったから、このやりとりが凄く楽しい。

あー、前は結構自由な生活だったな、私。

「変わったこと？んあー……特にな……、…あ。…ないこともないかも……」

一瞬、私は自分の目を疑つた。

というか、手でこすつてしまつ。

何故なら、シンデレラが、顔を少し赤く染めているからだ。

……あれ、錯覚かな。

幻想が見える。

疲れてるのかも、私。

「しんでれり？」

「……つえ、あ……な、なんでもないなんでもないーき、気にすんなつて、かは、かははつ、」

笑い声にいつもの霸気がなくなつていて。

とまどいすぎでしょ、シンデレラ。

それじゃあ、誰にだって、何か変化があつたんだってばれるよ。

「どうかしたの？何があつたの？友達として、教えてくれてもいいと思つんだけど」

「……こんなこと、ソーネの言つことじゅねーんだけど、さ。聞い

てくれるか？」

「聞く。シンデレラが困つてゐるなり、何でも聞く。それで解決してあげる」

ほん、とない胸を叩いてみせると、シンデレラがにかつと笑つた。

「頼もしいな。…でも、困つてゐとか、そーゆーんじやないんだよ。…実はわ、」

「うんうん。何があつたの？」

シンデレラは、一瞬目を泳がせてから、私を見つめて、じつまつた。

「恋煩い、なんだ」

その後、私の悲鳴が聞こえたのは言つまでもない。

「もう一度、しつかり説明してくれる！？」

「ちょつ…、ソーネ、怖い怖い、ガハハ、」

「説明してくれる！？」

「だからわー、」

頭をぽりぽりと搔きながら、シンデレラがはにかむ。

その頬は薄く赤に染まっていて、それがまた、私を妙にいらだたせた。

「！」の前、あたしが市場に行つたときによお、なんか…ちつせえ坊主と女の子が、売り物を勝手に取つて行こうとしていたんだ」

それは要するに、盗人だ。

そんなに小さな子供達が、泥棒をするなんて、信じたくなかった。

…この世界は、やっぱり怖い。

「あたし、それを止められなくってさ。…だって、まだこんなにちつせーんだぜ？」

シンデレラが手で大きさを示す。

それを見たところ、その子達はきっと、地球で育つ小学一年生だ。

……やっぱり、こんな間違ってる。

「…どうしていいか、わかんなかつた。店のおつかさんやおばさんも、苦労はしてるけど、一応食つていける。だけじゃ、あいつらはきっと…毎日毎日、ひもじい思いして、悪いことだつて知つてるのに泥棒して、それでもまだ腹が減つて…。そんなの、止められつかよ」

私は、唇を噛み締めた。

シンデレラは、ぎゅっと拳を握りしめている。

だつて、理不尽じゃないか。

毎日毎日、適当に暮らして、適当に遊んでいる貴族のオヤジ共は、裕福な生活を送つていて。

毎日毎日、ひもじい思いを噛み締めて、仕方なく泥棒をしている子供達が、いつまでもひもじい生活を送らなくてはいけなくて。こんなのがおかしくよ。

そりゃ、泥棒は悪いことかもしれないけど。

だけど、毎日食つちや寝食つちや寝してゐる迷惑オヤジ共に比べたら、全然マシだ。

だつて、子供達はみんな、賢明に生きている。

「あたしこはどうじょもできなかつた。悔しくて悔しくて、危うく暴れ出しそうになつた。…そんときだよ。あの人気が現れたのは

あの人？

「あの人は、突然立ちすくんでるあたしの目の前に立つてさ、子供達から売り物を取り上げたんだ。あたしが、怒つてそれを取り返そうとしたら、あの人は、お店の品物を、盗もうとしてた量の倍くらいい取つてさ、こう言つたんだ」

シンデレラが、そこでゅつくつ息を吸う。

「……どれだけひもじくても、どれだけ苦しくても、負けるな。もがけばいい」…そんで、あの人は、大金を払つて、すっげえ量の食料を、坊主達にくれたんだ

な、すげえだろ？

そう言つて得意げに笑うシンデレラを見て、私も笑つた。

いい男だね。

それにシンデレラ、貴方も十分、いい女だ。



## 030・シントケンの恋（後書き）

このネタ引かねえよ。  
つていうか字数に合わせていたら恐ろしい程バランスが悪くなつたとゆーね。

## ？？？・隊長とソーネの悪戯なHalloween

”Happy Halloween!!”

皆様こんばんは。

恋夢です。

下の繪は、白熊様からいただきました。

八一三三八三二—4296八

どうですか？

かっこよくなっていますか！――！

私は惚れましたよもぢりん。

なんだこいつ、ダーティのくせに……、ダーティのくせに……！

！（照／＼）

そんなこんなで、舞い上がり踊り狂って歌いまくって喜んだ恋夢が、白熊様へのわざやかなお礼として、全力で書き上げた物語がこれです。

本当に泣かせやかで申し訳ないのですが。

では。

白熊様にたくさん感謝と愛をこめて（返却はお断りですよー）

“Trick or Treat?”

「たーこちゅうー」

「…ソーネ？」

私の田の前に立つてこるのは、とても珍しくやかな顔をしたソーネ

だつた。

「何故ここに？」

その顔が無駄に可愛くて、強く抱きしめたい衝動に襲われた。

「ソーネですよーっ、隊長っぽ、私のこと忘れちゃったんですかー？」

「…ひそんな」とほ、「…」

そんなことはない。

明けても暮れてもソーネのことを考えている。

今頃何をしているのかとか、変な男に誑かされていないか、無事でいるのか…いつも考えているのだ。

「いいんです。私はビーセ、影が薄いので」

「…影に薄いも濃いもないだらう」

ソーネが顔をふいつとそむける。

「これは…、拗ねてる？」

その表情が恐ろしく可愛い。

…そういうば、今日のソーネは変わった出立立ちだな。

黒色の膝丈ドレスに、同じく黒い帽子。

そして、革のブーツ。

「ソーネ。この格好は、なんだ？」

「これはですね、魔女なんです！」

魔女。

聞き慣れない言葉だ。

魔法士のことだろうか。

「マジック…」

「はい…それから、地球ではハロウインの時期だなあって思つて…」

チキュー？

アロギン？

…何のことだ。

言つていることは意味不明だが、とにかく、理由があつてこの格好をしてているということとは分かつた。

それにしても、奇抜な格好だ。

「アロギン、か…楽しそうだな」

「ハロウインですか。あ、そうだそうだ。たいちゅー、」

にやつと不敵に笑みをこぼすソーネ。

…な、何だ？

何を考えている？

冷や汗がたらりとたれるのを感じた。

「“Trick or Treat?”

お菓子をくれな」と、

「お菓子？悪戯？

意味が分からぬ。  
どうしたことだ。

「たいちゅー、早くお菓子くださによー」

「…菓子など持つていない」

「えええっ。…じゃあ、悪戯、しきゃこまかよー。」

何をするところのだ。

ソーネのことだから…風呂に入れ、とか?

それとも、掃除を手伝え、とかか?

私が頭をひねっていると、ソーネが私の頬に手をかけた。

…。

「……ソーネ?」

「はい」

「…何を、してこむ?」

「悪戯です」

どんどん迫ってきているソーネの顔。

その辺の女共とは違い、飾り気のないシンプルな顔立ち。

…これは、逃げるべきか?

でも、ソーネから迫ってきてくれるなんて…こんなチャンス一度

とない気がする。

……よし、逆らつのはやめにしよう。

「隊長」

「…何だ?」

しまった。

ぼーっとしきっていたか。

私が慌ててソーネの瞳を見つめると、その皿がむりう形を変えた。

…。

瞳だけではなく、輪郭、体型、全てがぐこむりと歪み、形を変え  
ていく。

……そー、ね？

「たいちょ……、ダー テイ」

「おい、ソーネ？」

「ダーテイ。起きる。ダー テイ」

「ソーネ！？ソーネ、おい、ソーネ！」

ソーネが、ぐにゅぐにゅと歪んで、徐々に、見覚えのある人間に  
なってく。

この顔、この体、この髪型。

ああ、こいつは…、ムノイだ。

「ダーテイ！ダーテイ、起きろって！」

「……やあ、良い目覚めをどうも、ムノイ」

「目が怖いぞつ、ダーテイ！早起きは基本だーつ、ははははー。」

……笑い事ではない。

さつきのソーネが夢だったなど。

誰が信じられる。

いや、誰も信じない。

しかも、起きた瞬間に、ムノイ…だと…？

「…おいムノイ」

「んあ？どーしたダーテイ」

「…特訓に付き合え」

「…おいムノイ」

「え？え？え？ちよつ、ダーティなんで怒つてんの！？俺起こしだだけじやん！？むしろ感謝してくれよ、青春の醍醐味を教えてやつたんだぜ！？なあ、ダーティ、ダーティ、ちよつ…、おいしい！

!

何がアロギンだ。

# 何が悪戯だ。

いろいろ出来たのだ。

うん、やはりムノイを許す訳にはいかないな。

「それで、その男の名前は？容姿は？服装は？？」  
「ちょ、そんなに一気に質問されても困るつー！」

焦るシンデレラ。

かーわいい。

…ああ、これが、好きな子をいじめたくなる男子の心境なのかな。

「えつと…名前は、聞けなかつた。つづーか話しかけられなかつたよ。…見惚れちゃつてて、わ」

まるで見惚れたことが不本意であるかのように、シンデレラは眉をひそめる。

いやー、青春青春！

「それで、顔は？カツコイイの？」

「うーん…よく、分かんねえ。あたし、今まで男をそういう風に見たことないから。カツコイイとかかつこわるとか、全然分かんねーんだよな」

これは顔には期待できそうになーいな。

まあ、性格がいいだけで、十分点数は上がつている。

今のところイケメンテスト百点中六十点というところか。

「カツコイイかどうかはいいから、パートとかの説明をお願いしま

すシンデレラ様!」

「えーっと……。髪は…、金色で、目は…蜂蜜みたいな色だったな、うん。体型は割と細身で、身長はあたしと変わらないくらい。肌は白かった。若い、と思う

金色]と蜂蜜みたいな色つて…何が違うんだ。

細身で肌が白いということは、女々しいといふことかなー…。身長がシンデレラと変わらない、ってことは結構ちびだらうな。それに、シンデレラから見て若い…といふことは、あたしよりも年下くらいなんだろう。

……うーん、男らしい容姿にも期待はできないぞ、これは。

「…それで、服装とかは?そんな大金を持ち歩くくらいなんだから、お金持ちはっぽい?」

「お金持ちはつー感じじゃなかつた。深く帽子を被つてて、小汚い色のコートに、破れてるズボン、それから泥で汚れたブーツを履いてた」

小汚い色のコート?破れてるズボン?泥で汚れたブーツ?

そんな格好をした野郎が、いとも簡単に大金を、小坊主達に手渡すものなのだろうか。

いや、もしかしたらその大金は、シンデレラの好きな人の全財産なのかもしぬないけど。

そうだとしたら、とんでもないお節介だ。

「…謎ね

「謎だろ?」

汚いなりで、大金をぽいつと小坊主達にあげてしまう男。

……謎だ。

「ところで、ソーネは好きな人とか居るのか？」

興味津々、といった様子で私を見てくるシンデレラ。  
…ここでこうくるか。

地球でもよくあることだけれど、女子といつものは、恋をした瞬間に、周りまでもを巻き込むのだ。

『ねえ、アンタも好きな人居るんでしょ？教えてよ、ねえ、だつてあたしも教えたじゃん』

居ませんから。

「居ないよ」

「ふーん、そつか。じゃ、あたしの方が大人だな！」

「……私は、“今は”居ないよって言ったの。初恋はとっくに過ぎ去ったよ」

「嘘だろー」

「嘘じやないですかーっ」

私だって、初恋くらいはしてる。

いや、苦い思い出だけじゃ。

「……なあ、ソーネ」

「ん？」

「そういえば、こんな時間だけど、大丈夫か？」

「……」

大丈夫じゃ「」ません。

「ソーネー！だから、アンタつて奴は、ホントに……！ホントにホントに、馬鹿が直らないんだから！」

いろいろと文章がおかしいですダテイさん。  
なんて言える立場じゃないよな。

ただいま、お説教中です。

ダテイさんにこつてり絞られている真っ最中。

…「…、食欲が消え失せていく…。

まあ、怒られるのも仕方ないことだけどね。  
だつて、約束の時間から一時間は遅れた上に、食材を一個買い忘  
れてしまつたのだ。  
…私がダテイさんの立場だったとしても怒るわ。

「すいませんすいませんすいません…！」

「すいませんで許される問題じゃない…！…つたく、アンタ、次  
こんなことしたらただじゃおかないわよ。今日のところは、夕食没  
収で勘弁してあげるわ」  
「ありがとうござります！」

…あ、今唐突に食欲が湧いてきたぞ。  
お腹減った…。

夕食没収とか…最悪だよ、本当に。

ダテイさんのこめかみは、まだぴくぴく動いている。  
相当怒ってるな。

ここで反抗すると、余計怖いことになるだろ？  
やう思い、私はすぐあと、自分の部屋に帰ることにした。

「ソーネ」

「はい？何ですかダーティさん」

「誰が、帰つていいと言つた？」

「……え、」

でも、反省しなくちゃいけないんじゃ…。ダーティさんが、私の目の前で不敵に笑う。私の額から、冷や汗が一筋流れた。

…嫌な、予感が。

「もちろん、ソーネには、夕食の支度やら後片付けやらを、普通の人の五倍は頑張って貰うわよ」

63

覚悟しない。  
ダーティさんの目がそう語つている。

今でもお腹が減つて仕方がないのに。  
これ以上働いたら、私はきっと、お腹が減りすぎて死んでしまう。

「ソーネ。アンタ、食い物が欲しいとか言える立場じゃないの、よく分かってるでしょうねえ」

笑顔のダーティさん。  
でも、目が笑っていない。  
め、目でものを語る女つて怖い…。

「分かつてします」

「なら、せつせと働かなせてーこつひ

「ほいにこ

仕方あるまい。

トップシークレットを使はしないか。

私は、心中でそう決めた。

「ソーネ、何ボーッとしてんのよー!?

「すいませんでしたあー」

〇三二・眞味川のカンヅカヤツチ(墨書き)

何だか珍しいカバタイトル。

メイドの夜は早い。

そしてメイドの朝も早い。

だから私は、素早く脱走して素早く戻つてこなければならぬ。

ダディさんの大きなびきが聞こえてくる。

…よし、眠つたな。

念のための確認もかねて、ひょことダディさんのベッドを覗く  
と、幸せそうに眠つていた。

さあ、夜食を食べに行こう。

この城に居る私の知り合いは数える程しかいない。  
マリアさん、ダディさん、そして阿呆王子だ。

で、この中で食料を奪え…ごほん、失礼。

この中で食料をくれそうな人は、阿呆王子しかいない。  
そういうわけで、私は阿呆王子の部屋に向かっている。

「つたぐ、この城無駄に広いんだよねー。この面積の半分くらいで  
いいのに」

えーっと、王子の部屋はどうつけ。

あ、王宮だから最上階か。

あんな所まで階段は辛い。  
できれば遠慮したいが。

「Hレベーターが欲しい」

地球上に帰りたい。

「どうか地球に帰つてHレベーターを！」  
世界に持ち帰りたい。

まあ、そんなことを考へても結局階段を上りますけどねー。

今はメイド服を着ていないので、恐らくマコアさんとが戻くわ  
してもバレないだろ？

『食かなんかに間違えられるんじゃないかな。

…あ、それはそれでお城を追い出されてしまつー。

あたしが悶々と悩んでいたと、誰かの足音が上方から聞こえて  
きた。

だつ誰か来た！

どうするよ？どうする？？

私だつてことはバレないだろ？ナビ、座りすわせて追に出されると

こう可能性も捨てきれない！

…「うなつたら、堂々と歩こつしまおつ。

それが一番いい氣がする。

といづわけで、私は顔をあげずんずんと歩き出した。

徐々に足音が近づいてくる。

あと少し…あと少しど…、「」対面…。

「……お、」  
「……ひつ、」

うわあバレた！？バレた！？バレた！？  
焦りまくる私。

でも、それをなるべく表情には出さないようにして。

「…」苦労

「…い、いーえ…つ」

何がご苦労なんだろ？

ってうかこの人誰！？

怖くて顔をあげられないんですけど。

「…あー…………ではっ！」

「…つ、ひやい！」

何だひやいって何だひやいって何だ！

…もう嫌だ…。

噛みまくりだろ私。

…うん、とにかく、この階段を上りきらなければ！

私がそう思い、ぱっと顔を上げた瞬間、下りてきた人と目があつた。

綺麗な少年だ…。

悔しいけど、私よりも肌が綺麗だ。

それに細い。

男人といつよりは男の子といつ感じのあどけなさが残っている。

「…そりいえば、」

「はい！な、なな何でしょ、かつ」

「…」の上には、王宮の人間しか居ませんが

「……そう、ですか

き、気づかれた！？

私、怪しくないです！

……ただ、夜食をちょっともらひに行くだけで、全然怪しくなんか……ないと思つてます。

「なら、良い。じゃあな」

「は、ははは、はい！」

……気づかれ、なかつた……？

き、奇跡かこれは！

神様ありがとう！

リブルには感謝しないけども！

「」の調子で、王子の元を田描してれつつい——。

「で、僕の部屋に来たと、そういう訳か

「そういうわけです王子。とことことなのが、食料を惠んでくれださ  
い！」

「ソーネ……それが、夜中に男の部屋に一人で来て言うことか？」

「私には王子しか希望がないんですってば、さっさとなんか持つて  
きてくださいよこのあほんだら」

「アホンタリヤ？何だそれは

「気にしないでぐださい

どうせ説明しても分からぬでしょ貴方阿呆だから。

無駄なことはしない主義なのです。

「…まあ良い。確かにその辺りで、サンドウイッチがおいてあったはずだから、食べてもいいぞ」

「いただきまーすっ」

「…ソーネに羞恥というものはないのか」

「今はないつ。王子に使う必要がない！」

「はい傷ついた！僕は傷ついたぞ！」

サンドウイッチ…おいしい…！

何だるうこのちよふどい甘さ。

ああ…おいしい…。つ。

「…ソーネ」

「ふあい。ふあふふえふか

「相談があるんだ」

「…ふあ？」

相談？

阿呆王子が？

私に？

…なんだろう。

頭を良くしてくださいとかだつたら無理だな。

お金持ちになりたいとか？

…十分金持ちだわコルア。

だつて見てよこの部屋！

何で一面ピンクなの！？

どこのファンシー小娘だ貴様！

阿呆な王子は髪も部屋も全てがピンクなのであった。

そして装飾品とかがきらいしているよー。

あの壺とか絶対高い！

高値で売れちゃうよー！

…いや、あんな趣味の悪い壺を置くより物好き居ないか。

「ふおうふあんつへなんへふふあ」

もぐもぐもぐ。

さつきのサンデーウィッチが卵だったとするど、今度のこれは…ハ

ムだな。

うー、地球の味を思い出すよ…おつかれ…つ。

「実は……、僕、シンデレラに恋をしてこむろんなんだよ

…。

私は、食べていたサンデーウィッチを二杯と飲み干してから、大げさに咳をした。

…あー……耳の調子が悪いのかも。

うん、耳鼻科に行かなければな！  
さて、王子の相談は何だっけ？

「王子、今なんと仰いました？」

「だから、僕はシンデレラに恋をしてこむるん

「あああああ”ー?」

シンデレラ。.

この王子が。

この粘着質王子が。

この粘着質阿呆王子が。

恋！？

「王子、生きます？」

「…ソーネ、僕をなんだと思っているんだい？」

「阿呆だと」

「…失敬な！僕はね、この美貌と才能で世のあらゆる男子の嫉妬を  
買い、あらゆる女性の、」

「黙れ阿呆王子」

「ごめんなさい」

## 032・回味HIMのサンダウチャッタ（後書き）

ああ。

「めんよシントヘア。

そしてソーネと王子の組み合せが好きすぎる。

シンデレラに。  
この阿呆王子が。  
恋。

…そりや、あり得なくはないよね。  
シンデレラは可愛いし。  
豪快だけどいい子だし。

でも。

シンデレラには、好きな人が居るの。」  
惜しいね王子。  
ちょっと遅かったな、うん。

「王子」「  
「ん?なんだ?」  
「どんとまごんど」  
「は?」

田を丸くする王子。

それを横田に、私はサンドゥイッチに手を出した。  
ふむー、上手い。

サンドゥイッチは万国共通なのですね。

といつかコレはあれなのでは。

日本で使われている名前は通用しないとか？

あ、それならどんとまいんども通用するはずか。

…異世界つて意味が分からぬ。

「なあソーネ。それより、僕の恋の始まりを聞きたくないか」

「聞きたくないです」

「……メイドにサンドゥイッチを作つてもうおつと想つていたのに  
なあ、残念だ」

「聞きました」

それでこそソーネだ。  
と、王子はニヤリと笑つた。

「じゃあ、僕の恋の始まりを語ろつか。

…ひょっとソーネ、サンドゥイッチこぼすのはやめてくれないか。  
ほら、またぼろぼろこぼれてるから！全くソーネはだらしがないな  
あ。え？僕には言われたくない？どうじつことだい？？  
いや、そんなことはどうでもいいんだ、うん。

ソーネも知つてる通り、僕とシンデレラは前に一度会つたことが  
あるだろ？え？覚えてない？ソーネ、とぼけてないか。

あーもう、これ以上話をそらさないでくれるかなソーネ。とにかく、あのとき僕は、シンデレラを好きになつてしまはなかつたんだよ。  
そりや、少しは気になつていたけどね。

僕が、シンデレラに恋に落ちたのは、僕が街へ出たときだつた。  
僕だつて街に出るんだよ。もちろん、馬車に乗つての見物だけだね。  
それで、そのときに、彼女を見たんだ。

綺麗だつた。

初めて、自分以外の人を美しいと感じた。それくらい、あのとき

のシンデレラは綺麗だつたんだ。

え？ シンデレラはそのとき何をしていたのか？ ソーネは僕の話に水を差すのが好きだな、うん。

シンデレラはそのとき、窓ふきをしていたよ。今でも僕の目には、はつきりとあのときの景色が浮かぶんだ。

ぴかぴかの窓。その窓の向こう側に居る銀髪の少女。きらりと光つたエメラルドの瞳。そして、極上の笑み。

なあ、ソーネ。

胸が、ズキズキと痛いんだよ。  
初めてなんだ、こんな気持ち

王子がぽけーっと窓の外を見ている。  
どうせ妄想にでも耽っているのだろう。

全く、これだから恋する男といづやつはいけ好かないのだ。

「分かつただろ？ ソーネ。シンデレラがどれだけ美しいかということが」

「よく分かりました、王子が恋をしたことによつて更に阿呆にいつていることが」

私の皮肉にも、王子は答えない。

それどころか、にやにやと私を眺めている。  
な……なあんか嫌な感じ。

「ソーネは、ヤキモチを妬いているのだろ？」

「は……、一？」

誰が、誰が、誰に、ヤキモチを……一？

顔がカアアツと熱くなるのを感じた。

「……王子」

「なんだい、ソーネ」

いやいやと、こやらしに耳つきで私を眺めてくる王子。その王子を思いつきり睨む。

ナメんな。

私は、阿呆に惚れるほど馬鹿じゃないんだ。

「私、帰ります」

「え? 帰るの? 何、怒ったのか、ソーネ?」

「別に! ! !」

がん、と派手な音をたてて扉を閉める。

あー……。

ムシャクシヤする! !

隊長へ。

はいけい。

こんにちは、隊長。

私は元気です。

ところで、あのあほ王子が変かわをしました。ほんとうにあほですね。

しかもそのおあいではしんでれりですよ。

みのほどちがいにもほどがあるわってかんじですよね。

まったく、あほはビリうるんでもあほなんだから! -

隊長もすてきな変をしてくだしゃいね。

おつえんしていますよ。

私はですね、変をしたいんですけど、でないがないのですよ。

かなしこですね。

それでは。

いつも元気なソーネよー。

ついや。

そうじえぱ、フライパンありがヒーピーヤこせした。

またそのうちあわびにゆきます。

そのときせせしんでれりとむのつむくわくわくヒペーひーしまわく  
ね。

では。

隊長もお元気で。

78

「そ・お・ね!」

「ふあふあひやいー?」

「いい加減置きなさいこいつてんでしょーがーつたぐ、こつまで寝  
ぼけてんのよアンタはー。」

あれ。

あれ……いつの間に、朝?

「うーあー、やだな、私つてば、隊長への手紙書きながら眠りや  
つたのか。

おお、朝日が田に染みる……。。

「おはよー! やることも、す、ダティせん」

「アンタは“おはよう”だわよ、ホントにだらしがないわね。んで

?ちやあんとい反省、したんでしょうね?」

「ももも、もちろんです!」

そのとれ、ちゅうじ私のお腹がぐーっと鳴った。  
うわ。

サンディウイッチをもう一個食べておけば良かつた。お腹を押せえて座り込むと、ダテイさんが心配そうにのぞき込んでくる。

「ソーネ。アンタ腹減つてんの?」

「は、はい」

「仕方ないから、さつきの朝食の残り、あげるわよ。普通なら、遅刻した罰として朝食抜きなんだからね。感謝しなさこよ」

「ははははー! ありがとうござりますー!」

恋とか。

そういうことはまだよく分からない。

地球では初恋とかを経験して、キスまではステップを踏んで。それでも、シンデレラや王子が言ひよつた、「どきどき」や「ズキズキ」にはめぐり逢つたことがない。

隊長は私のことを好いてくれてこらじしくて、それは少し嬉しがつたりもするんだけど、それでも、どきどきとは少し違う。ズキズキとした痛みも来ない。

だけど私は、私らしい恋を経験したいから。

だから、ゆづくつと、自分の足で進んでいこうと思つ。



## 033・ソーネは恋愛と「いつ」とを学んだ。（後書き）

ソーネは恋愛といふことを学んだ。

チャラリラー #」

ソーネはレベルが1アップした。

チャラリラー #」

つてふざけてる場合ぢゃないんです。

はい。

ええ。

来ました、テスト。

頑張ります。

といふことなので、来週の更新は恐らく不可能です……。

ごめんなさい！

毎度毎度のことなんですが、やつぱり申し訳ないです。  
私なんかの小説を待ってくれている人が居るのに…！

それでも、中学生にとつては勉強が一番。

泣く泣く机に向かいます（涙涙涙）

では。

また再来週に…！

034・彼と彼女とそれから侍女（前書き）

なんて縁起の悪い。  
と思つたら間違えてた。

王子がシンデレラに恋をして。

シンデレラは謎の男に恋をして。

それでも世界は廻っています。

そんなくだらない歌を口ずさみながら、私は街を歩いていた。  
昨日は念願の給料日だったのである一万歳！

というわけで、今日は私はショッピングをしに街へ出かけている  
のだ。

「何を買おうつかなあー」

服。

でも、メイド服で十分だし。

ちなみに、私は今もメイド服で街を歩いている。  
対して目立ってはいない、と思つ。

家具。

雑貨洋品。

非常用食料。

いつそケーキでも食べて、この金をぱーっと使ってしまうつか。

突然、甲高い音が聞こえた。

それはまるで、私が小さい頃愛用していたラッパのような。  
な……何！？

音の下方向へ目をやると、真っ赤な衣装を着た兵隊さんが、ぴし  
つと立っていた。

そして、その兵隊さんの後ろには、おとぎ話に登場しあつた馬車。

本物なの！？…って、本物か。

兵隊さんが高らかな声で叫ぶ。

「ここのおられたは、ウォルナート王国第一王子、リグト＝ウォールナト様である！道を開けい！」

どこかで聞いたことのあるような名前だ。  
そう思い考へていると、一人の人物に思い当たつた。

あんの阿呆王子めが。

「セーの貧しい侍女よ、だけ！」

「……え、あ、私？」

「お前以外に誰がいる」

いや、結構居ると思つけど。

そんな反論は心の内に修めておき、私は兵隊さんに向き直つた。

「ところで、何故王子がここにいらっしゃるのです？」

「うむ。リグト様が気に入つた姫を、王宮に迎えるためだ」

何故か偉そうに言つ兵隊さん。

私は、その兵隊さんの言つてゐる意味が理解できなかつた。

王子が気に入つた？

姫？

王宮に迎える？

全てのワードが頭の中では繋がると、私はものすごい勢いで、シンデレラの家へと駆け出した。

シンデレラが、阿呆王子の嫁になってしまった…！

「お、おこいら、貧しい侍女！待ちなさい、おい！」  
「待てと言われて待つ者居ない！教えてくれてありがと、丘隊さん  
！」

スカートが翻る。

酒飲みのオヤジたちがおよつとびよめく。  
つむさい黙れ飲んだくれ共め！

シンデレラを王子の嫁にしようなんて、例えお天道様が許そつが、  
このソーネ様が許さないんだから…

「シンデレーラ…！」  
「えっ、お、あ、ソーネ…なんだ、びっくりしたー。どうした？何  
か用か？」

相変わらず男前なシンデレラに、ひとまづ安心。

よかつた、阿呆王子の魔の手はここまで伸びてはいなかつた。

「逃げて！」  
「どうしたソーネ、ガハハハッ！」  
「とにかく逃げよう！」

説明なんかしている暇はない！

私は、シンデレラの家に文字通り転がり込み、シンデレラの腕を  
ぎゅっと引つ張った。

「ソーネ、なんで逃げるんだ？」

「シンデレラが無理矢理結婚させられたやうからー。」

「…なんだそりやー！ガハハハツ」

「笑い事じやないつて！ほら、早く裏口から逃げてーあ、ていうか変装しよう、せりしよー！」

王子がこの家にたどり着くまでは、せいぜいあと数十分。その間に、シンデレラを変装させて、裏口から逃げ出してもらわないと。

「シンデレラ、男物のズボンとかある？』

「んー…つと、確か親父の服があつたけど、」

「それだー！」

シンデレラの父上のズボンとTシャツをクローゼットの中からあつり出す。

無難なTシャツと無難な色を見つけて、シンデレラに着てもらった。

なんだかシンデレラは楽しそうだ。

さて、シンデレラの綺麗な髪と皿を隠すにはどうあればいいのだろうか。

元の世界だと、サングラスを使うよねー…。  
それから、髪を隠すには…。

……あ。

帽子だ。

帽子を使えばいい。

皿深に被ればバレないだろ？

「シンデレラつ、次は帽子！帽子を深く着用して、髪を帽子の中に

入れて！…できた？よし、そしたら裏口から逃げて！森の辺りまで行つたら、そこでほとぼりが冷めるまで待つて。後で様子見に行くから。」の家は私に任せなさい。あと、シンデレラのドレス借りるからね

「…あー…、つまり、あたしはこの帽子を被つて森に行けばいいんだな？」

「そうこうこと。だかえど、走っちゃ黙田よ。あくまで自然に…」  
「ん、分かった。任せとけッ、ガハハハッ！」

シンデレラが裏口から出て行ったのを確認して、私はシンデレラの部屋に入った。

そこはクローゼットから、シンデレラのドレスを取り出す。  
そして、その上にコートを羽織り、帽子を深く被つた。

…よし。

これで、少しばは時間を稼げるはず。

「王子…シンデレラが居ません…」  
「なに！？何故だ？シンデレラは僕が迎えに来るのを待ち望んでいるはずなのに！」  
「…お言葉を返すよつですが、王子。シンデレラは、逃げたのではないか？」  
「…何で？」

不思議そうな顔をする王子を見て、兵士はひつひつとため息をついた。

「…人には、常識といつものがない。

「実は、先ほど、この家から大あわてで走り出し、パートと帽子を被つた女を見かけたという情報が入ったのです。この時期にパートはまだ早いです。ということは、」

「なるほどーさすがシンパトーレラだ！僕とおいかけっこがしたいのになー望むところだ！」

「……あ、そうかもせんね」

兵士せいしんざしそうる。

全く、この阿呆王子が！

「では、早速シンパトーレラを捕まえよーうーうさ、やうじよーう」「はっ。仰せの通りに」

このとき兵士は、大通りで見かけた、貧しい侍女のことが気になつたのだが、そのことは王子には言わなかつた。そのことを悔やむのは、もう少し後のこと。

〇三五..井の頭のさかひのまつり(前書き)

あー。  
サブタイトルとか書ひついで路逵ひついでここにわ

この時期には暑苦しいコートを引きずり、街を走る。

走つた方が田立つ。

田立つたら、本物のシンデレラをカモフラーージュできる。  
だけど、いくら何でもこれは暑い…。

人通りの少ない路地裏まで走つて、そこでようやく私は足を止めた。

ぜえぜえはあはあと肩で息をする。

ふいー、こんなに走つたのは体育祭以来だ。

「体力落ちたー」

これでも、日本に居た頃は一日中お掃除していくも全然兵器だつたのだ。

それが、たつた少しのランニングで、ここまで疲れてしまつとは。

…つて、待てよ。

そういえば、日本に居た頃も、体育は苦手だったような。

……体力が落ちたんじゃない。

……元から、私には体力というものが装備されていないのだった。

「つむ、納得」

さて、納得できたところで。

れつづらー！

と、私が片足をあげたそのときだつた。

「貴方が、アッシュズ＝レイシャンジ嬢ですね」

まだ声変わりもしていなじような、がきんちよの声が聞こえた。  
私が身を固くして振り向くと、そこには無表情の青年が居た。  
……ん？ どつかで見たことあるような。  
どうだつたつけ。

んー……思い出せないや。

それよりも。

私が、シンデレラだと間違えられている？

もしや、王子の手下？

……これは、まずい。

ここで王子に捕まつたら、本物のシンデレラが逃げ切ることができなじやないか。

何としても、誤魔化さなければ。

「……失礼するわよー！」

私は、青年の真つ正面に立ち、急所をがつんと蹴つた。  
うん、乙女としては言い難い場所だけど、つまりその、股間でありますね、はい。

「ウッ！？」

うめき声をあげる青年の胸をじんと突き、青年がよろけた隙に逃

げ出す私。

今じゃー！

「おいこり、アッシズ＝レイシャンジ嬢、待…  
「待てと言わられて待つ者居ない！」

今こそ見せつけるが良い、私は短距離走だけは得意なのだからー！  
…って、あれ、自信なくなってきた。

私、体力がないのではなくて、運動神経そのものがなかつたよう  
な気が……。

……うん、気のせい気のせい。

そんなことをうだうだと考えながら走っていたせいか、途中です  
っここんだ。

痛い。

地味に痛い。

ひざがすり切れていませんかこれ。

あーもう、泣きたい。

でもここで止まつてはいられない！

ということで、走り出そうとした私だったのだが、…捕まったよ。  
後ろから凄い勢いで追いかけてきた青年に捕まつたよ。  
足、速すぎるだろう。

「…っ、っ、お、お前…！」

血走った目で私を見つめる青年。

なんかもう殺人鬼にしか見えませんけど。

すっここんで起きあがろうとした、微妙な立ち方の私の肩に、青  
年はぐいっと手をかけた。

転ぶフラグが立つた気がする。

そう思つたのもつかの間、私はこれまたもののみじみとばかりいへ  
んだ。

青年と一緒に。

しかも、私が青年の上に乗る形で。

「ぐえつ」

「重いとか言つたら口ロロスー！」

乙女にそんな酷なこと、言わないよね？

ぐつたりと倒れている青年の背中を思いつきり踏んで、駆け出す

私。

今日一日、それだけでも逃げ切ることができたなら……。

「さよなら青年さーん！」

「んなつ！？あ、アッシズ＝レイシャンジ嬢つ」

それにして、青年に初めて会つたときに感じたあの違和感。  
あれは一体、何だつたんだろう？

うん。

今では愚かだつたと思つてるよ。

さすがに、男女の壁は高かつたね。

そんなことにも気づかなかつたなんて、十分前の私は馬鹿みたい  
だよね。

「“んで”！？あんたはアッシズ＝レイシャンジ嬢なんですね！  
？」

「違いますけど！？」

「喧嘩売つてんのか小娘！」

「売つていますとも！だいたい貴方に小娘言われる筋合いないつ  
ーのー！」

絶対私の方が年上だし！

この手が“自由だつたならば”今にでも血漫の鉄拳を奮つている  
ところだわ！

私の手は今、縄で縛り付けられている。

それどころじゃない。

足も、ひざも、それからウエストのあたりまで、きつく縄で縛ら  
れている。

青年によつて、だ。

ななな、何も、胸まで縛ることないじゃんね！？

いくら私だつて、縄抜けの技とか知らないし！

いや、もし縛られているのが手だけだつたらやつていたかもし  
れないけど。

でも、でも、乙女の胸を縄できゅんときゅんに縛るとか……つ。  
サイテー！

「小娘は小娘でしょうが。どう見ても俺より年上のくせに小生意氣  
な、」

「私、十八歳ですけど」

「……ナニ？」

「私、十八歳ですけど」

もう一度繰り返すと、サッと青年の顔が青ざめた。  
どうやら、私よりも年下だったようだ。

ザマアミヤガレ。

「君は何歳なのかな？」

思いつきり侮辱しながら訪ねると、青年はきつといひを睨んだ。  
へつへーんだ、そんなの痛くもかゆくもないわ。

「俺は……、十六だ」

「ふーん。：餓鬼」

「つだ、誰が餓鬼だ、誰が！…だいたい、お前は俺に縛られてるん  
だからな！？」

「やつだー、何を始めるつもりですかあー？変態いーっ  
黙れ黙れ、黙れえええ！」

さて。

どうやってこの縄を解いて貰おうか。

私は、余裕な笑みを顔に貼り付けて、じっくりと考え出した。

## 036・金色のアイツ（前書き）

サブタイトル見てアイツがどいつか分かつた人はうちの常連さんですね

「いい加減、この縄を解いてくれない?」

「まだだ」

いつの間にか、敬語が消えてなくなっていた。  
青年は、私の前に座り込んで何かを考えている。  
あ、そういえばここいつの名前知らないや。

「それじゃあや、お前教えてよ

「……サム」

「……そんだけ?」

「今はこれしか教えられない。お前は?」

お前つて。

年上に向かってお前つて。

しかもサムとか、明らかに偽名じゅうねえか。

と、つっこみどころはたくさんあるが、とりあえず置いておいて。

「私は、爽田絵衣。サワダがファミリーネーム。愛称はソーネ。だからソーネって呼んでね」

年上ひじへ微笑むと、サムは困惑したように首をかしげた。

「俺を、そんなに信用していいのか?」

「別に、信用した訳じゃないけど、親から授かった名前を隠そっと

まるまで疑つてもこないし

ね、とサムに言ひ。

すると、サムは何故か顔を赤くした。  
な、何でー？

「…そ、そつか。そだよ、な  
「うん。んで…、この繩をあつせとほざいてくれない?  
「それは無理だ！」

そろそろこいかなと思つたんだけどな。  
敵は意外と手強い。

…仕方あるまい。

シンデレラのためだ。

うん、そつ。

女の魅力とやらを最大限に使つてやるつじやないか、うん。

「サムくん!」

語尾にハートマークとかが付きそうな勢いで話しかけてみる。  
即座に蒼くなるサムの顔。

……な、何故だ……。

「どうしたソーネ、気持ち悪いぞ」

「はこはい、わるいぜとした

「どうせ私は可愛くないですよーだ。  
女の魅力とやらも備わってないしなー

…あ、虚しい。

せじと。

私に女の魅力がないやうんたらは置いておけ。女の魅力が使えないならば、残る手段はただ一つ。

强行突破。

「サム、私耳がかゆい！」

「あ？」

「かゆい！かゆいかゆいかゆーー！サムが私を縛つてんだから、サムが私の耳をかきなさいよ」

「何でそつなるんだよー。」

なんだなんだ、不満なのか？

と、目で訴えかければ、サムはものすごく嫌そうな顔をした。乙女の耳に触らしてやるのってんだから、せつせつと触れよー！

「まじ、サム。むうちょつと手をのぞして、わあ、私の耳にー。」「どーの酔っぱらじだ」

とか言こつつ、サムがおそれおそる私の耳に手をのぞみしていく。

よし、あと五十センチ。

三十センチ、十センチ……あと、すこし。

そこで、サムがしゃがむ。

……つしゃあ来た！

ここで私の得意技の足蹴りを……つて、

出来ない！

そういえば私縄で縛られてた！

そんなのすっかり忘れてたよ、何してんだ自分！

… こうなつたら、あれを使うしかない。

強行突破の中で、一番相手にダメージを与えるのが、自分にもダメージが来る技。

できればこれは使いたくなかつたんだけど

私は、自分の頭を、思い切りサムにぶつけた。

卷之二

サムが睡べ

サムにぶつけた頭の中で、がんがんと音が響いている。でも、伸くつかないかなーいのぞ。

私の大声が路地に木霊する。

誰か、助けに来てください。

といふが、そんな「都合主義な展開にはなつてくれなかつた。

た。

そんなのあるわけないってか！

「……ソーネ」「……」  
「ちよつ、立ち直るの畢いよサム！」

「な、何が早いよだつ。ソーネは何回俺を騙せば気が済むんだよー。」

「何回でも。サムが私を、助けてくれるまで  
『そういうわけにはいかないだろ』

そういえば。

なんでサムは、私を助けてくれないんだろう。  
最初は、ただの意地だと思つていたけれど、どうやらそれは違つ  
みたいだ。

もしかして、サムもシンデレラのことが好き…とか?  
それで、シンデレラを手に入れたくて、私から情報を聞きだそう  
としている?

「サム」

「んだよ」

「アンタ、シンデレラのこと好きなんじょ  
「……っはあ??.」

田が点になるサム。

おーい、そこそこ美しい顔が台無しですよー。

サムの髪は綺麗な金色。

瞳は、髪の色よりも深い金色。

何て言つか…あ、そうだ蜂蜜みたいな色。

顔は、男のくせに可愛らしく整つている。

まだまだ餓鬼っぽいけど、将来が楽しみだ。

「だって、それでもなくちや、私をここまでする必要がないじゃな

い」

「あー……。そうだな、まあ。でも、俺はアッシズ=レイシャンジ

嬢に恋をしてる訳じやねえよ」

「そりなの？じゃあ何で、私を助けてくれないの？」

「簡単に言えば人助け。もう少し詳しく言うと、身内の恥を抹消させるため」

「は……？」

今度は私の目が丸くなる番だった。

サムが、喉の奥でくくつと笑う。

…笑顔は、なかなか可愛い。

そのとき、間抜けな飛行音が聞こえた。

しいて文字にするなら、「びゅーん」とでも表すような。

私は、…とても、嫌な予感がした。

「な、なんだ？」

サムがきょどきょどと辺りを見回す。

そのとき、私の目に飛び込んできたモノがある。  
私が路地から見上げた空には、“金色”の物体が、飛んでいた。  
というか、こちらに向かつて落卜…いや、あれは完全に、突撃し  
ようとしていた。

「……金の雑巾だ…」

「え？ なんて言った、ソーネ？」

「金の雑巾だ。金の雑巾だ。金の雑巾だ」

「え？」

ねえ。

どうすればいいって言ひつの。



## 036・金色のアイツ（後書き）

最近コメティ重視しすぎて意味が分からなくなっています。

あ、そうだ。

えつとですね、異世界大掃除？、？と続いたのですが。

正直言つて……。

私、駄目なんです。

物語を切るタイミングが全然分からなくて。

そのせいか、？と？を分ける辺りで、

「分ける意味ないかも」

と一人思つたりもしまして。

そういうことなので！

いつそくつつけちゃおつかなと！

嫌だー、って人は一言言つてください。

作者の勝手な都合です。

「？」が完結したらくつづける予定です。

それから、先週は予約掲載の日にちを間違えてしまったよつで。  
申し訳ありませんでした！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7313w/>

---

異世界大掃除?

2011年12月16日18時56分発行